

附子 14. 号 氏

(平成2年)

1990年

6/26

河北新報

刊

# 入浴で心不全好転

鹿児島大「常識」覆す治療法  
講師発表へ

これまで慢性の心不全患者の入浴は薬物とされてきたが、逆に、入浴が心不全の治療に効果的だとする臨床例が、二十八日に福岡市で開かれる第二十七回日本リハビリテーション医学会学術集会で鹿児島大学から発表される。従来の常識を覆す新しい治

療法で注目を呼びそうだ。発表するのは鹿児島大医学部リハビリテーション科の鄭忠和講師。慢性の心不全で入院を繰り返している患者五人を二日二回入浴させたところ、全員が症状が目に見えて好転したという。

鄭講師らが考案した入浴療

法は、患者の体を四〇―四一度の温水に十二分間横たえ、という大胆なもの。慢性の心不全患者ではほんの少し体を動かすだけでも息が切れるため、入浴などは原則として避けなければならぬが、鄭講師らは入浴が末梢血管を広げ、血液の流れを

よくし、心臓のポンプ機能を助ける作用を持つことからこうした治療を試みたという。実際にこの治療を二十三歳から六十四歳までの五人の慢性心不全患者（拡張型心筋症四人、虚血性心筋症一人）に心臓病薬を用いながら朝夕の二回施したところ、四週間で

全員の自覚症状（悪苦しさなどが薄れ、心臓の機能にも改善が見られた。また、入浴中に気分が悪くなった患者もいなかった。中には心臓移植さえ必要とする拡張型心筋症で十年間寝たきり状態にあった六十歳の男性がいたが、この入浴療法により現在は一人歩きもできるようになった。鄭講師は「現在も十二人の患者にこの治療を行っており、個人差はあるものの全員の病状が良い方向に向かっている。今後はサウナなど活用、入浴・温熱療法として確立したい」と話している。